

31.

今年は珍しく、八月八日の立秋はさわやかに朝風が風鈴の舌にたわむれ、この涼しさを嬉しく感じた。今までは手紙のはじめに立秋とは申しながら大変暑うございますという具合な書き方をしてきたのに今年こそはさすがに立秋の名にそむきませんと挨拶することであった。

よく耳にすることは季題が混乱する、季題が無用になるので作句が難しいと訴えられる。ことに経験浅い若い人ほど、その声の多いのはもっともであろう。

しかし自然の姿がそのままに保たれる場所を発見した時のその驚きは全く命が甦る喜びを感じる。

自然の中にいて慣れてしまえば感動がない状態に置かれる。結構なことが結構と受け取れない皮肉が起こる。

だから私は季題が混乱すればするほど季題の妙味を追求する欲望が強まってこななくてはならないと思うのである。季題を無用と考えるなら俳句よりもほかの詩に鞍替えしなさい。

俳句はあくまでも自然の秩序や変化を観察してそこに詩情を湧かすことである。

32.

彼岸の入が来ました。昔から暑さ寒さも彼岸までと言います。その彼岸です。

彼岸花が赤く咲きだしたことを不思議に私は感じます。いや不思議でもなんでもないのでしょうが、彼岸のくると彼岸花が方々に赤くあらわれるのが軌を一にする。その自然のはからいがあまりに正直だと感心したわけです。彼岸花を曼珠沙華として俳句に多く詠まれます。

木犀もこのごろ匂います。黄疸になったとき物が黄色く見えたので私は勝手に金木犀を好まなかったのです。しかしそんなことをもう忘れ去ってしま匂う木犀も好いといっております。

かねたたきは明るい昼も遠慮がちにチンチンと七つ八つほど叩くように鳴きます。勿論夜は他の虫と共に合奏に加わります。

自然がこうして移り変わりがあるのは面白いではありませんか。それでいて順序というものを変えないで繰り返しを続けています。

自然を愛する俳人は人間（人工）に騙されても決して自然に騙されたことはないのです。

33.

詩は志を述べると言われます。俳句といえども私の心に湧いた感情を相手に通じさせなければなりません。

ところがです、自我に執着すると通じないのです。一度自我を捨てて無我の境地に向かうことが必要で、つまり私というものを客観視して非人情という立場から冷静に表現するのが秘訣のようになります。

自分をよく理解させるために相手の側から観察するという客観描字の手段をとるべきであります。

それ故に俳句は客観して、内部に主観を見通す訳になります。

情熱と非人情とは裏表である。非人情は非々人情であるという一見矛盾のようなことを漱石の「草枕」に表しています。

無我もしくは無私、そういう境地に立たないと本当の自分の心が通じないものであります。

俳句は短詩型であるだけに自我を説明する余裕もないので、直感直感で突進致しましょう。